

あしがき 今東光と天台宗政改革運動

昭和5 (1930) 年に出家を決意した今東光は、10月1日に茨城県安楽寺住職 弓削俊澄のもとで得度受戒した。天台宗僧侶としての歩みを始めた東光は、30代の青年僧侶として、当時混迷の度合いを深めていた天台宗政を改革する動きに加わった。

東光らが直面した天台宗政の問題とは、江戸期以前から全国の末寺を支配していた総本山延暦寺と、明治期以降に政府の命令で宗派の統轄機関として組織された天台宗務庁との間の権限争いであった。総本山延暦寺は、平安期の開創以来、玉体安穩（天皇の健康を祈る）などを目的とする様々な法要を執行しており、その権威に基づいて末寺に君臨する存在であった。天台宗務庁は、長である総務（現在の宗務総長）を末寺住職による選挙で選出しており、宗派の世論を背負う存在として、総本山延暦寺が握る権力を規制しようとした。

東光ら改革派の天台宗青年僧侶は、昭和8 (1933) 年に雑誌『宗団意識』を創刊した。『宗団意識』出版の事務局は、天台宗務庁の録事（総務補佐）であった落合寛茂が務めており、天台宗務庁側の立場を代弁する雑誌として、総本山延暦寺の改革を求める論説などを掲載した。

9月1日付の『読売新聞』は東光らの動きを報じており、社会的にも注目された。しかし、昭和9 (1934) 年に弓削が死去し、安楽寺の後継住職をめぐる東光と落合が対立したために、東光は改革の動きから脱した。その後の総本山延暦寺・天台宗務庁の対立は、両者の合併を図る中央宗務機関合同運動へと進んでいくのである。（叡山学院比叡山文化研究所研究員 藤田 和敏）

【資料館より】

このコーナーでは今後、研究者・学識経験者のかたに今東光や今東光がいた頃の八尾に関するコラムを執筆していただく予定です（不定期掲載）。様々な視点から、新しい東光や八尾の魅力を発見していただくことができれば幸いです。



KON TŌKŌ MUSEUM

今東光資料館だより
令和7 (2025) 年 No.5

夏

編集・発行：今東光資料館 tel.072-943-3810
〒581-0003 大阪府八尾市本町2丁目2番8号
八尾図書館3階



今東光と1970年大阪万博のころ

いま、大阪・関西万博が活況を呈しています。

現地を訪問してみますと、「いのち輝く未来社会のデザイン」のテーマのとおり、世界各国の多種多様な先進技術、人々が織りなす文化・・・その壮大さがひしひしと伝わってきます。幾つかのパビリオンを見てみると、それぞれの演出の違いを楽しめ、各国担当者との交流もでき、世界を感じることができるステージとなっていました。

さて、万博といえば、今東光も前回の大阪万博(EXPO'70)には浅からぬ縁がありました。

・・・大阪で万博開催が決定し、(中略)お祭り広場で全国民謡大会があると聞けば、わが町の「河内音頭」を大阪府代表として出場させると、知事にハッパをかけ、天下に紹介されることになったことなど、あまり知られていないようだ・・・ 『直木賞作家・今東光和尚』

(「八尾市史」近代 本文編 所収 昭和58年12月)



大阪万博の「お祭り広場」で披露された「河内音頭」

また、万博会場「日本館」において、東光(当時：参議院議員)と実弟：日出海(当時：初代文化庁長官、東光と同じく直木賞作家)のコンビが当時の皇太子同妃両殿下(現上皇 上皇后 両陛下)をご案内する貴重なシーンも写真に記録されています。

現在、今東光資料館で開催中の企画展示では、こうした「EXPO'70・八尾・今東光」をキーワードに、現在開催中の大阪・関西万博や、そこでの八尾市の出展に関する情報も交えながら、時をこえて万博と八尾の魅力を紡いだ展示を展開しています。ぜひ資料館にお立ち寄りください。(岡本)

【企画展示情報】

「1970年 大阪万博のころ ～今東光と八尾の今昔～」

令和7年12月28日(日曜日)まで

最新の開館状況、注意事項等はホームページ等でご確認ください。



昭和32(1957)年11月 東光59歳、文化の日を記念して第一回八尾市文化賞が実施され、直木賞作家今東光、木村保氏の二名が表彰されました。(写真)

八尾高校野球部の木村氏は27年の春・夏の甲子園に連続出場、夏の大会では準優勝投手、早稲田大学から32年南海ホークス(現福岡ソフトバンクホークス)へ入団その年のパリーグ・新人王(21勝13敗)を獲得しました。



左：協田市長 中央：今東光 右奥：木村保



早稲田大学時代の木村保
(資料：八尾高校体育部 OB 会十周年記念誌より)

明治のはじめにベースボール「野球」が伝来してから、明治29(1896)年第一高等学校が横浜外国人チームに勝利し、野球人気が全国的に高まりはじめ、大正4(1915)年には全国中等学校優勝野球大会(大阪・旧豊中グラウンド)、現在の夏の甲子園大会の始まりです。(参考：日本野球の歴史-野球殿堂博物館公式HPより)

さて、大正元(1912)年関西学院時代の東光(14歳)は、黒板の文字を読み違えるほどの近視ながら白球を追う野球少年であり他方では文学部、絵画部、聖書研究会など10を越える部会にも熱中する多感な少年を、自伝的小説『悪童』に書いています。…私は野球部に属していたので真新しいユニホームを着て、スパイクのついた軽快な靴を穿き、殆んど夏を想わせる陽の下でたらたらと汗を掻いた。球を放ったり受けたり打ったりして(略)

…私はすすめられるままにユニフォームを借りてグラウンドに立った。私の練習振りを多勢の学生等は感嘆の眼差しで眺めていた。しかしながら私は学院の一年生の選手ではあったが、本選手ではなかった。総別、関西の方が野球が発達していたのは気候の故ばかりであろうか。東北地方らしい鈍重な動作は、軽快で多分に機智的な野球には向かないように思われた。荒れたグラウンドなので球が扱いにくい思いだったが、私は弘前中学の本選手位にはプレイすることが出来た。…

(『悪童』昭和32(1957)年 現代社 所収より)

昭和100年目、107回を迎えた夏の甲子園大会、高校野球をとりまく環境は大きく様変わりをしてきていますが、今年も若人の汗と涙と歓喜の姿に、自身の青春を重ね、思いを馳せる人も少なくないのではないのでしょうか。(木村)

『縁は異なもの?』

昭和四十五年六月二十九日、大阪万博会場の日本館を訪れた当時の皇太子・美智子様をご案内する今東光さんの表情は、神妙なような嬉しさを隠しきれないような感じが、とても微笑ましく思います。(写真)



右手前：現在的美智子上皇后 左奥：今東光

さかのばれば、昭和三十四年四月十日に、皇太子・美智子様のご成婚パレードがとり行われ、世間のミッチーブームは最高潮に達し、東光はさまざまな媒体で、民間からの皇室入りに対して賛意を表明するコメントや文章を発表していました。

特に、ご成婚記念として出版社が企画した異色な特集があります。

タイトルは「皇太子さま 美智子さま おめでとう! 私たちの贈りものです」という昭和三十四(1959)年四月号の文藝春秋漫画読本に掲載されたもので、さまざまな有名人が皇太子美智子様のご成婚に際して趣向を凝らしたプレゼントをするというものでした。

東光は挿絵と文章のどちらも担当する力の込めようでした。あまりにもユニークですので、全文引用しておきます。

河内国八尾はブラッシの産地でございます。私の檀家のうちにも沢山のブラッシ産業があります。たとえば

岩田浅吉親分のごときは矢張りその製造業者であります。伊之助親分こと芋谷清さんは準檀家で軍鶏喧嘩の名人と共に本業はブラッシ産業であります。天皇様に皇太子様に本物の狸の鬚でブラッシを献上したことがありますが、あれは原価で一本三万円くらいの最高級品であります。私も河内の天台院の住職でございますので、矢張り土産の物がよろしくろつと存じ、誌上を通じまして世界最高級品をお二方様に謹んでプレゼント致します。私の微衷を御くみとり下さいませ。八尾に住む刷子業者等もどれほど光栄と存じ悦ぶかわかりませぬ。

地元の仲間を紹介し、郷土自慢を織り交ぜながら、金銭感覚で笑わせるユーモアに満ちた名文はさすがだと、唸つてしまいます。四百字詰め原稿用紙1枚足らずで書かれているのに、大胆不敵と繊細な心配りが行き届いた短文の見本のような文章です。ここに、東光画と記されたシェービングブラシとヘアブラシが捧げられています。

きつと、当時の皇太子・美智子様に、言葉もブラッシも届いたものだと思いたくなる気持ちになりませんか。この雑誌の企画が縁となり、万博での再会時には

「あの時の面白いお坊さまですか」

そんな人間的なやりとりがあつたかもしれないと、勝手に想像をふくらませてしまいます。

ちなみに、エキスポ70での案内から約三か月後の十月に、東光はお二方を中尊寺でも案内していて、くつろいだ表情の三人が印象深く、万博の時間の続きが流れているようで、縁の不思議を感じさせてくれます。